

# 学力評価の最前線

## 小特集編集にあたって

編集チームリーダー 藤芳明生

TOEFL/TOEICを受験したことがある人は、受験者及び問題が毎回異なるテストでありながら本当に同じ基準で評価が行えているのか、疑問を感じたこともあるのではないだろうか。実際、TOEFL/TOEICを複数回受験してみると、よほど英語力が向上していない限り、ほぼ同じような点数を受け取ることになる。これは、TOEFL/TOEIC等の最近のテストでは、項目反応（応答）理論と呼ばれる新しいテスト理論に基づいた採点が行われているからである。今日、TOEFL/TOEICは、大学の入学試験や、会社の人事考課に利用されているが、これらのテストがどのような理論に基づいて学力評価を行っているのか知らない人は多いように思う。

本小特集は、項目反応（応答）理論等の新しいテスト理論に関する研究や、コンピュータや情報通信技術を利用したテストの研究を、教育工学に携わる読者をはじめ、新しいタイプのテストに関心のある読者に対し、紹介しようとするものである。

本小特集は7編の記事からなる。最初は、テスト理論に関係する二つの記事である。筑波大学名誉教授の大友賢二先生に、「項目応答理論——TOEFL・TOEIC等の仕組み——」を御執筆頂いた。新しいテスト理論の必要性を論じて頂き、古典的テスト理論との違いを明確にしていきながら、項目応答理論を解説頂いた。

大学入試センターの荘島宏二郎先生に、「ニューラルテスト理論——資格試験のためのテスト標準化理論——」を御執筆頂いた。入試の現場では1点の差に泣く受験生が多数存在する。テストをそのように利用してよいのか問題提起して頂くとともに、ニューラルテスト理論という最新のテスト理論を解説頂いた。

次に、新しいテストの実施形態を解説する記事が続く。

電気通信大学の植野真臣先生に「e テスティング——最先端テスト技術——」を御執筆頂いた。Web上でテストを実施するe テスティングは、既に実用化が進んでいるが、活発な研究が続いている。e テスティングは、どのような利点を持つのか、何を狙っているのか、解説頂いた。

大学入試センターの藤芳衛先生に、「テストのユニバーサルデザイン」を御執筆頂いた。テストは人の人生を左右する道具である以上、すべての受験生に対して公平でなくてはならない。「障害者に対応する」という発想ではなく、「最初から障害者を含むすべての人々に向けた試験を設計する」という発想が必要であることを解説頂いた。

別の視点からテストを考える記事が続く。早稲田大学の永岡慶三先生に、「グループ学力の測定」を御執筆頂いた。よく知られたことわざに「三人寄れば文殊の知恵」があるが、人はグループを成すと個々の能力以上の力を発揮するといわれている。グループ学力を測定するための方法を解説頂いた。

国立教育政策研究所の山森光陽先生に、「教育評価とテスト」を御執筆頂いた。テストは様々な角度から教育に影響を与えている。教育心理学の視点から何を考えるべきか解説頂くとともに、テスト研究と教育心理学の協同の意義を論じて頂いた。

テスト技術の未来を感じさせてくれる記事で締めたいと思う。石岡恒憲先生に、「小論文自動採点」を御執筆頂いた。小論文自動採点は夢の技術のように聞こえるが、既に米国では実用段階にある。批判も多いが、主観や系列的効果が排されることにより人の採点より公平であるという主張もある。小論文自動採点技術の最新動向と今後の可能性を解説頂いた。

最後に、本小特集の取りまとめにあたって御尽力頂いた皆様方に、心からの感謝を申し上げます。

小特集編集チーム 藤芳 明生 趙 晋輝 小松 聡 小峯 一晃 高橋 康博  
堀 玄 村松 正吾 目黒 光彦